徒然草

花は盛りに　―　現代語訳　―

（桜の）花は満開のさま（だけ）を、月は曇ったところがない（澄み切った）ものだけを見るものだろうか（いや、そればかりではないだろう）。雨に向かって（見えない）月を恋しく思い、（簾などを）垂らして（部屋に）閉じ籠もって春の暮れていくのを知らないのも、やはりしみじみとして情趣が深いものである。（今にも花が）咲きそうな頃の梢や、（花が）散ってしおれてしまった庭などこそ、見どころが多いものだ。和歌の詞書にも、「花見に参りましたが、もう散ってしまっていたので。」とも、「差し支えがあって（花見に）参りませんで。」などとも書いてあるのは、「花を見て。」と書いてあるのに劣っていることであろうか（いや、劣ってはいないだろう）。花が散り、月が（西に）傾くのを残念に思う（人々の）ならわしはもっともなことであるけれども、とりわけ情緒を解さない不粋な人が、「この枝も、あの枝も散ってしまった。もう見どころがない。」などとは言うようである。

（花や月だけではなく）何事でも、初めと終わりがことに趣深いものだ。男女の恋愛でも、ひたすら逢って契りを結ぶことだけを（恋愛と）言うのであろうか（いや、そうではないだろう）。結ばれないで終わってしまった（恋の）つらさを思い、はかなく実を結ばなかった（恋人との）約束を嘆き、長い夜を（逢うこともできず）ひとり（寂しく）明かし、遠く離れた場所（に住む恋人）に思いをはせ、（今はさびれた）茅が生い茂った荒れた家で（共に過ごした）昔を懐かしく思い出すのこそ、恋の情緒が分かると言えよう。

満月が曇りなく照らしているのをはるか遠い所まで眺めているのよりも、明け方近くなって待ちに待って（ようやく）出てきた月が、たいそう趣深く、青みをおびているようなさまで、深い山の杉の梢に見えている、（その）木の間（越し）の月の光や、さっとしぐれを降らせた群雲に隠れた（その月の）様子などが、この上なく情趣深い。小さな椎の木や白樫などの、濡れているような（光沢のある）葉の上に（月の光が）きらきら輝いているのは、身にしみて、この情緒を解するような友がいてほしいなあと、（そのような友がいる）都が恋しく思われる。

総じて、月や花とはそのように目だけで見るものだろうか（いや、そうではない）。⑫春（の桜の頃）は家から外へ出ずとも、（秋の）月の夜は寝室の中にいるままでも、（桜や月のことを）思い描いていることこそ、まことに確実に、情趣を感じられるのである。教養があり情趣を解する人は、むやみに愛好する様子にも見えず、楽しむさまもあっさりとしている。⑭片田舎の人こそ、しつこく何事ももてはやすのだ。（花を見るときも）花のもとに、ねじり寄り近寄り、脇目もふらずじっと見つめ、酒を飲み、連歌をして、果てには大きな枝を、思慮もなく折り取ってしまう。

（そんな人たちは）泉には手足を浸し、雪には下りたって跡をつけるなど、あらゆるものを、それとなく見るということがない。